

フレッシュ研修報告

10年目の挑戦

慶 勇樹（商業科）

1 はじめに

福岡での2年間の教員生活を経て、奄美高校で勤務して7年目の採用試験で、「合格通知」をいただくことができた。

「学校の先生になりたい」という夢を抱いて、教育現場に立ってから10年という長い道のりにあきらめそうになった時もあったが、合格発表の一覧表に自分の受験番号を見つけたときは、夢を追い続けて本当に良かったと、心から思うことができた。

また、9年間の教員生活で様々なことを経験させていただくことができた。福岡時代では、女子校で勤務し、生徒たちとの関わり方や指導法について当時の学科主任から様々なことを教えていただいた。この2年間で、私の教員としての基盤ができたと思う。

奄美高校に赴任してからは、創立100周年記念や奄美高校レストラン、日商簿記1級プロジェクトなど、他では経験することがないようなことを多く経験させていただいた。日々の授業でも、多くの先生方から助言をいただき、授業者としてどうあるべきかと常に考え続ける7年間であった。

このような経験から、私1人の力は少なくとも、PTAの方々、先生方、同窓会の方々、地域の方々など、「子どもを育てる」という1つの目標に向かうことで、大きな力になることを学んだ。

2 初任校1年目の目標

私には、初任校での目標を3つ立てた。

- (1)生徒に寄り添い、信頼される教員であること
- (2)ICT機器を活用し、ユニバーサルデザインの授業を組み立てること
- (3)「当たり前」を「当たり前にする事」の重要性を身につけさせること

3 研究授業

初任校研修として、1年目では3回の研究授業を実施することになっている。臨時的任用教諭の時代から常に略案の作成を行っていたが、指導案を作成していると、「もっとこうしてみた」「こういう授業をしてみたい」「ICTの活用をしてみたい」という、自分本位の授業作りになっていたことを改めて感じた。

指導案を作成する際に、指導教官や様々な先生方に見ていただき、ご指導していただいた。その中で、生徒中心の授業作りが大事であることと、興味関心を引くような授業作りが大事であることを再確認することができた。

(1) 第1回研究授業（6月10日 簿記 1年情報処理科）

簿記の基礎を学ばせるために、座学や暗記中心になるような授業ではなく、積極的に授業に参加できるように工夫をし、6桁精算表の作成をさせた。

入学して間もなく、人間関係の構築もできていないことを考慮し、複数人のグループ学習ではなく、ペア学習（2～3人）を中心に授業を構成した。また、答えを導くだけの授業ではなく、ペア内での話し合い活動や、全体への発表を通じて、自分の考えを他人へ伝えることにも注目し、授業構成を考えた。



個人学習に取り組む様子



ペア同士確認し合う様子



ペアの考えを発表する様子

(2) 第2回研究授業（12月9日 簿記 1年情報処理科）

簿記の一連の流れを学習した生徒たちへ、帳簿の修正をテーマに授業展開を行った。あらかじめ、間違いのある帳簿手続きを用意し、個人考察では「どこがどのように間違えているのか」を考えさせ、グループ考察では「なぜ間違えたのか」を帳簿の手順に沿って話し合わせた。

1学期の授業では（第1回研究授業時）では、人間関係の構築不足からペア学習を中心としたが、第2回研究授業では複数人（4～5名）でのグループ学習とした。また、タブレットPCを活用し、授業中に困っている生徒へヒントカードを配布することにより、個人考察の時間を有意義に活用させる工夫をした。



自分の考えをまとめる様子



グループ学習を通じて帳簿の間違いを指摘し合う様子



グループの考えを撮影し、ロイロノートで共有する様子



ロイロノートを活用し、ヒントカードを確認する様子

4 今後の課題

私は、この1年間で、3つの目標をもとに教員生活をスタートさせたが、生徒に寄り添う指導をするためには、生徒の立場に立ち、「どんなことに悩んでいるのか」どのような背景からそのような行動をとることになったのかを慎重に判断する必要があると思った。

また、生徒の気持ちを理解するためには、日頃のコミュニケーションや情報共有が最も重要であり、小さな変化も見逃さないことが大切であると感じた。

また、ICTの活用では、より効果的な方法を模索するとともに視覚情報への刺激が必要であり、そこにはBGM（音楽）や効果音などの聴覚情報により注目を集めることも必要であると感じた。

「当たり前」とは、生徒が社会へ出た時に最も重要であることを何度も伝えることで定着させるものであり、強制的に実行させるものではないと思う。そのためには、生徒が納得するために様々なアプローチが必要であり、私自身の勝手な独りよがりではなく、根拠を常に持ち続け、理解させるためにゆっくりと語り合う必要があると感じた。

5 おわりに

指導教官の先生をはじめ、全先生方にご指導いただき、感謝の気持ちでいっぱいである。

2年間の他県での勤務と7年間の臨時的教員経験を経て、10年目にしてようやく「教諭」としての生活をスタートさせた。

これまでの教員生活とは異なり，高校3年間を見据えて指導をすることができる喜びをかみしめるとともに，社会に飛び立つ生徒とともに成長できるような教員生活を目指していきたい。

また，今年度は，一人ひとりのスモールステップを常に意識し，指導し続けたつもりだが，全員に寄り添うことのできる指導は私にとっては困難であった。

これからは，生徒の自己肯定感・自己有用感を上げるために，常に「できるようになったことは何か」という点に注目し，指導していきたいと思う。

また，私には，指導教官をはじめ，各分野でのエキスパートの先生方が多く指導してくださる。このような学校での初任校研修でとても嬉しく思うとともに10年目の初任者として新しい気持ちで教員生活をスタートさせたい。